

# 日本の民話



NIPPON



LIBRARY

毎日ライブラリー

# 日本の民話

木下順二編

毎日新聞社刊

毎日ライブラリー

—日本の民話—

昭和三十五年三月十五日 初版

定価三四〇円

編者との申  
し合ひに  
より検印を  
省略します

編者 木下順二

発行者 高木金之助

印刷所 図書印刷株式会社

製本 渡辺製本所

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町一ノ二一  
大阪府北区堂島上二ノ三六  
門司市清滝町一ノ九〇二  
名古屋市中村区堀内町四丁目

## 目次

|   |             |   |
|---|-------------|---|
| I | なぜ民話を問題にするか | 1 |
|---|-------------|---|

|    |         |    |
|----|---------|----|
| II | 民話とはなにか | 17 |
|----|---------|----|

|   |       |    |
|---|-------|----|
| 1 | 民話の歴史 | 18 |
|---|-------|----|

まえがき

動物民話

宗教民話と神話

説話と昔話

呪術と説話——作り物語の民話性

英雄物語と本格民話

民話の開花——民話の仕上げ

社会的な民話と笑話

怪談の意義——宗教性の克服——笑話と落語

むすび

2 民話の世界……………138

はじめに

炉端の世界——伝承の世界——民衆の心の世界

ふしぎなことがあたりまえな世界

困ってもくよくよしない世界

貧乏人が金持になる世界

美しい心の持ち主がばかをみない世界

3 民話研究の歴史……………179

はなしは減び去ったろうか

埋もれた遺産の発掘

日本民俗学の功績

民俗学的方法の問題点

新しい研究の拾頭

### Ⅲ 民話と現代

1 民話を現代にどう生かすか

2 現代に生きる民話

歴史の岐路に立つ主人公

新しい道標

二つの《信》

あとがき

235

236

249

283

# I

なぜ民話を問題にするか

なぜ民話を問題にするか、という問に対しては、いろいろな立場からの答があるだろうと思われる。いろいろな立場というのは、たとえば民俗学者、歴史学者、芸術家、教育者、また特別な専門家ではないが民話に関心をもっている人々、もっと一般的な意味ではラジオやテレビの聴視者などなどの立場のことだが、そのそれぞれに、なぜ民話を研究するか、なぜ教材に使うか、またなぜ見、聞くか、さまざまの理由があるだろう。

だが考えてみると、そういう理由の説明はしばしば理窟としての説明になりがちであって、この問に対する本当の答は、実はそれぞれが、自分みずからの心に問うてうべきものだと思うわれる。他人にどう説明するかではなく、なぜ自分は民話に関心をもつのか、せんじつめればなぜ好きなのか、その魅力があるからこそ、理窟はいろいろとつけながらも、結局私たちは「民話を問題にする」のである。だからその点をはっきりさせないでは、本当はこの間に答えることにならないのちがいない。

たとえば私は、というふうに個人的に、いいかえれば具体的に考えていくことが、そこで意味をもってくるようだ。たとえば私——筆者——はなぜ民話に心ひかれるのか。私の好きな民話はたとえば何か。いろいろな例を、むろんあげることができる。より正確には、いろいろな例をあげなければ十分に説明することができぬ。好きといっても、その内容や側面がいろいろとあるからだ、今はささやかな一例だけを、まずあげることにしておく。

あとかくしの雪

とんと昔があったげど。

あるどこね、貧乏のやごめ婆さがあつたてや。冬のはじめ頃、この村に、こじきぼんさまが、まわつてきて、婆さのどこへ来たときは、へえ、暗うなつてしまつたと。

「婆さ、婆さ、こんにゃ一晚、泊めてくれ。」

「おらどこは、貧乏で、なんもねが、なじょうも泊まつてくれ。」

「そうか、それはありがたい、おら、なんもいらんど。」

と言うて、ぼんさまが泊まつたてや、婆さの家は、ほんとに貧乏のがんで、何もないがんだと。そつれ、婆さは、仕方がね、となりの家の、大根におの中から、大根を盗んで来て、大根焼きをして、ぼんさまに食わした。ほうしたら、ぼんさまは、婆さが大根を盗んで来た、雪の上の足あとを消してやろうと、その晩ね、あとかくしの雪を降らしたがんだてや。ほうして、このこじきぼんさまは、弘法大師さまだというこんだ。この日は、もとの十一月二十三日で、今でも、お大師講と言うて、大根焼きをして食うがんだ。ほうして、この晩に降る雪を、あとかくしの雪と言うがんだ。

これで、いちごさけた、どつぺん。

筆者は越後の山奥のこの話が好きである。なぜだろうか。「こじきほんさま」が実は弘法大師であつたという付会や、その弘法大師が「婆さが大根を盗んで来た、雪の上の足あとを消してやろう」と雪を降らしたという説明や、そういうところはあまり筆者の関心をひかない。だが貧乏な貧乏なお婆さん<sup>ばあ</sup>が、せっかく泊めてやったみずばらしい旅人をせめて何とかもてなしてやろうと思つて、思いあまつて隣から大根を一本盗んできた。その足あとが音もなく降りつもる雪でやがて消えてしまつたという話には、筆者の心をひくなものか含まれている。それは何だろつか。同じ話を秋田に残るもう少し深刻な話として、小林多喜二が書いており、多喜二のその再話はこの話の本質をよりよくとらえているように思われる。

### 十二月の二十何日の話

雪の多い秋田の田舎<sup>いなか</sup>で、学校というものを全然知らないで育つた私の母は、子供に対して決して沢山<sup>たくさん</sup>の「お話をしてくれだ」あの母ではなかった。忙がしいことも忙がしかつたのだろう。——ところが、たった一つ印象に残っている話がある。

私の母は毎年十二月の二十何日かには、きまつて「おこわ」（赤飯のこと）を作つて、その日になつて沢山雪が降ってくれると喜んだ。「これで安心した！」と言う。然し<sup>しか</sup>、せっかく「おこわ」を作つても、雪の降らない年があると、暗い顔をした。——母は何時<sup>いつ</sup>か（忘れたが）そ

の事の由来を話してくれた。

昔々、母の生れた村に沢山の子供を抱<sup>か</sup>えた貧乏な小作が住んでいた。だんだん食えなくなつて、本当に食えなくなつてしまつた。お父<sup>ちち</sup>さんは毎日々々、自分では一粒の飯も食わないで、子供たちばかりに食わしてきたのだが、それもとうとうそのどんづまりまできてしまつた。もう子供たちは二日何んにもたべていない。お父さんはとうとう「神さま、私はこの十何日のうち一粒のごはんもたべないでやつてきました。それなのに子供さえも死にそうです。私は決心をしました。今夜子供たちを助けるために地主さんのところへ盗みをしに参ります」

それが十二月の二十何日で、お父さんが地主の土蔵から米俵を背負つて出てくると、神さまの助けか、雪がにわかに関り出してきて、歩く直ぐその後からお父さんの足跡を消してくれたんだそうです。

話というのはこれだけです。それがどうい<sup>い</sup>き<sup>さ</sup>つをとつて、村の習慣になつたか知らないが、今でもその村の貧乏な人たちは十二月の二十何日に「おこわ」をたいて、雪の降るのを待っているそうです。(一九三二・一〇・一八)

〔婦人公論〕一九三二年一月号〔青木文庫小林多喜二全集第八巻、評論篇〕所収〕さきにいったように、この多喜二の再話のほうが、この話をつくりだした農民の気持をより深く伝えているように筆者は思う。この話の本来の魅力は、それがこういう貧しい農民の心情を伝

えるものであるところから出たものであつたにちがいない。

だがまた、別な面からこの話の味を考えてみるができないわけではない。つまり多喜二の再話は少々深刻すぎるのではないか。そういう深刻な場合もあつたろうが、もっとのんびりした農民らしさがこの話を愉快なものに仕立てた時もあり得ただろう。そつと隣から持ってきたきちまつた、そしたらうまいこと雪が降つちまつた、あつはつは、という、ユーモラスな妬ばたの笑い話であつたとは考えられないか。それからまた、何とかしてもてなしたいという誠意ばかりがそこに働いていたとはきめられない。もてなせないのははずかしいからという、貧乏人のいらぬ見えからこんなことが起つたとも考えられなくはなさそうである。

いずれにしても、窮屈に一面的に解釈することはないと思うのである。あるいは、上にいった説明の全部を包含したこれは話だと考えてもいいだろう。よく聞くことだが、夜なかに隣の家の畑との境の石を畝<sup>うね</sup>一つこつそり向うへ動かして帰ってくる、すると次の夜には石が畝二つこつちの畑にくいこんでいる。みつからなければそれまでだし、しかしみつかつても空つとぼけてきた人々である。大風の吹いた朝あけに、自分の田よりも隣の田の被害を(それがなるべく大きければいいという気持で)まず見るといふように、切実で、こすつからくもあるが、一面、ずぶといユーモアをかかえこんでいるというような生活感覚が、雪を「あとかくし」と実感するのであろう。

そこに日本の農民のいきづかいを筆者は感じとるのである。そしてつまり、そこに筆者はひかれ

るのである。

そしてそういう魅力のもう一つ奥には、雪という「自然」に対して農民が持っている——長年の間にいつか持ってきてしまった——ある心情があるのかもしれない。いわば自分で織った手織り木綿もめんをあつかうような調子で、雪というものを、この話の中で農民は扱っている。

## 雪

雪がコンコン降る

人間は

その下で暮しているのです

（石井敏雄作——無着成恭編『山びこ学校』所収）

山形の山の中で、ひとりの中学生がつぶやいたこの短い言葉を読むとき、いつも筆者はその雪が生きてうごめいてものを言いだしそうなけいをは覚えるのだが、それはやはり少年である作者の中に、雪という自然に対するあの農民的心情が、いつの間にか深く降り積っていたからだろう。ただ、この短い詩はそういうものをいきなり私たちに感じさせてくれるが、民話のほうは民話特有の「語りくち」でそれをもう少し濃く感じとらせてくれる。彼らの上に降ってくる雪に、きわめてあたりまえのこととして農民たちは、貧しい日々の暮しの中で彼らがいただく願望をこめてい

たということを、「あとかくしの雪」は告げてくれるのである。ふつう文学では情景描写の材料でしかない「自然」というものが、農民の世界ではそれへ人間がまともに向かいあい、心を通じあい、時として言葉をかわしあいさえするものなのだということを、「あとかくしの雪」は教えてくれているともいえるように思う。

そういう、実にいろいろな感情や意味や連想を含めて、このささやかな「あとかくしの雪」という民話は筆者の心を動かすのである。そしてそうすると筆者は、自分にできる仕事として、この話にもう一度自分の筆で生命を与えたいと願う。話自体をよりよいものにすることによって、また、それをより多くの現代および将来の人々へ活字を通して伝えることによって。——つまりなぜ問題にするかの結果として、どう問題にするかを考えてみると、筆者の場合はそういう「筆による再話」という方法に帰着する。それが学者の場合には「研究」であるだろう。教育者の場合には教室での「口による再話」であるわけだろう。

それから筆者の場合、筆によって再話しようと考える裏には、今ひとつ、本来の口から耳への民話の伝わりかたが、すでに滅び去りつつあるということへの筆者なりの気持がある。そのところの事情について、次のような文章が目につれた。

「百話も昔話を記憶している高齢者が何人もいるところは越後のほかにはない。そのうちの一人を蒲原平野に訪ねてみたが、もはや老女のとをつぐ伝承者はなく、口から耳への昔話はほろ

びへの道を急いでいた。最近空前の「民話ブーム」はそれを補って余りあるものといえよう」

(五八年二月八日読売新聞——のち『わたくしたちの伝説』所収)

つまり一方で民話は「ほろびへの道を急いで」いる。そしてそのこととの微妙な相補関係において、「空前の「民話ブーム」」が起っている。そこで「ほろび」のほうだが、「口から耳へ」という伝達方法の衰微、つまり本来的な「語られるもの」としての民話というものが文字どおり民衆の話として民衆の中に生き、娯楽や教育、または共同体の規制、それから反抗や諷刺精神のはけ口、時としては新聞の代り、そういうことのため、いわば実用的機能を持っていた時期は、もうだいぶ前に過ぎ去ってしまった。それは一つには共同体自体が変質し、民話がその変化に適應して新しい展開をするだけの力をもたなかったことによるだろう。以後民話は、そういう時期の「遺産」として語りつがれてきたわけだが、だが今や「遺産」として口から耳へ伝えられるというそのことさえ絶えようとしているというわけである。本来文字の媒介をいっさい経ないで、したがって固定することなく時代とともにたぶん少しずつ太りながら生きてきた民話というものが、いよいよ記録者によって文字に固定されるよりほかなくなったということは、あのお婆さんといっしょにさばさばとあきらめるより仕方がないことだろう。あのお婆さんというのは前に引いた「あとかくしの雪」の語り手のことで、彼女は一九五五—七七年に、「あとかくしの雪」を含む百二十二話を、つまり前記の単行本『とんと昔があつたげど』一冊の全内容をひとりで語ってくれ

た貴重な伝承者だが、この長島ツルさんが、九十一才を迎えた五八年の一月四日の放送で、もう昔話を聞きたがる子供たちもいなくなって寂しいでしょうというアナウンサーの問に対して、気軽に次のように答えている。

「世の中がよくなるにつれてハナシ（昔話＝民話）は終えっちまった。もう死んでええと思うけども、あんまり世の中がひらけてよくなるで死ンとうない」（文化放送「録音構成・新春民話考」）

ツル婆さんのこの発言はきわめて現実的だが、そのツル婆さんは、あの前掲の「あとかくしの雪」を、それを語ったわずか数年後、つまり右の言葉を放送で話した同じ年に、おそらく自分でも気がつかずに、次のように語り変えているのである。

とんと昔があったけど。

と、あるどこに、やごめばさまがあったげな。

晩方、こじき坊さまが、

「今夜、ひとばんとめてくれ」

と、きたてや。

そうすると、やごめばさまが、

「なんにもなくてとめられね」

と、いったてや。

「なんにもなくてもいいつけ、とめてくれ」

と、いって、坊さまがとまったてや。

ばさまの家はほんとうになんにもなくて、それで、ばさまは大根一本ぬすんできて、それ焼いて、坊さまにまかになった。盗みたくて盗んだわけでもねえが、なくても食わせてえあまり盗んだてや。こらまあ、ばさまの親切だと思って、大師さまが、朝と、ばさまが盗んだといわれでは大変だてや、大根盗んだあとかくすてや、その晩雪ふらした。

それを今では、弘法のあとかくしの雪とてや、弘法大師さまが大根盗んだあとかくすて、雪ふらしたとてや。

それで、いきがほんとさけた。

(NHK、一九五八年一月二十二日夜放送・座談会「民話の世界」)

相手が変れば語り方も多少変ることは民話の常であるが、この場合はもっと本質的な変化——崩壊——が起っているように思われる。きわめて説明が多くなって、民話特有の聞き手を、語り手の描く世界へひきこむようなリズムがなくなっている。民話は、民話の虚構する世界を信じない相手の前には、素朴にくずれ去るものなのである。つまり民話は、今後研究者の研究や芸術家の創造や教育者の実践やを通して生れ変わり、民話に心をひかれる広い大衆の中に新しく生きてい